

講師

水貝 洵子

■ 学歴

1. 九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻 博士後期課程 単位満期取得後退学

■ 学位

1. 臨床心理修士（専門職）

■ 研究分野

1. 臨床心理学
- 2.
- 3.

■ 研究キーワード

1. 青年期
2. 発達障害
3. アクションメソッド

■ 研究課題

1. 青年期を対象に心理社会適応の促進を目指した臨床心理学的支援の在り方について検討する。
特に、臨床動作法や心理劇などのアクションメソッドを用いた支援の在り方について検討する。
2. 学生支援の一環として、本学全学科の1年生を対象に健康管理カルテの配布および利用状況調査を行い、健康管理カルテの活用の仕方について検討する。

■ 担当授業科目

1. ヒューマンサービス基礎演習（前期）必須
2. 初年次セミナーⅠ（前期）必須
3. 発達アセスメント演習（前期）選択
4. 健康臨床心理学（前期）選択
5. 初年次セミナーⅡ（後期）必須
6. 臨床心理学概論（後期）選択
7. 障害者心理学（後期）選択
8. 発達臨床心理学（後期）選択
9. 認知行動療法基礎演習（後期）選択
10. スクールカウンセリング論（後期）選択
11. 専門研究Ⅰ（通年）必須
12. 専門研究Ⅱ（通年）必須
13. 対人関係論（前期）（看護学科）必須

14. 臨床健康心理学（後期）（看護学科）選択

■ 授業を行う上で工夫した事項

※ 助教・助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項

1.	<p>授業科目名【ヒューマンサービス基礎演習】</p> <p>他者との円滑で受容共感的なコミュニケーションの体験や自分自身への気づきを深める体験が得られることを目指し、様々な対人ワークを実施した。その都度、受講生自身による振り返りを行った。1年生前期での実施のため、受講生の緊張感に配慮し、自発的な参加ができるようワーク内容を吟味した。</p>
2.	<p>授業科目名【初年次セミナーⅠ・Ⅱ】</p> <p>学生の提出した課題に対し、多かった回答内容や模範となる回答内容を示しながら、ポイントの解説を行った。課題に関して教員と学生間で一方的なやり取りに限定されないよう、上記のような方法で課題に対するフィードバックを行うなど受講生との相互的なやり取りを心掛けた。</p>
3.	<p>授業科目名【発達アセスメント演習】</p> <p>学生の多くが実習や就職後に活かせる知識と技術を身に付けようと意欲的に受講していることが予測された。そのため、ロールプレイングを通じ実際に発達検査を実施する体験を提供するだけでなく、発達検査を通じた被検者の特徴の理解の仕方や支援への活かし方について事例検討等を通じ学習した。</p>
4.	<p>授業科目名【健康臨床心理学】</p> <p>受講人数が少なかったため、受講学生の関心領域を尋ね従来の授業内容との関連を持たせながら、解説やワーク等を新たに加えた。また、4年生開講科目であるため、事例の紹介なども適宜行い、より実践的な内容を取り入れるようにした。</p>
5.	<p>授業科目名【臨床心理学概論】</p> <p>臨床心理学の基礎となる理論について解説した。学生からの質問や感想に対し、授業で取り上げて回答や解説を行うなどして、学生の知識の定着や理解の深まりをはかった。</p>
6.	<p>授業科目名【障害者心理学】</p> <p>精神障害から身体障害にわたって代表的な障害を取り上げ、診断的理解及び社会生活において障害児者がどのような体験をしている可能性があるかについて生涯発達の視点から解説した。診断的理解にとどまらず、当事者の立場から障害について理解する視点が培われるよう、事例や当事者の手記等を適宜資料として提示した。実習等で本講義での知識が活かされるよう適切な援助の在り方についても、臨床心理学的援助を紹介しながら解説した。</p>
7.	<p>授業科目名【発達臨床心理学】</p> <p>発達障害当事者の手記を教材として障害当事者の体験的理解の深まりを目指した。障害や障害者支援に関し多角的に考え捉える機会となるよう様々な事例を提示した。</p>
8.	<p>授業科目名【認知行動療法基礎演習】</p> <p>認知行動療法について初めて学習する受講生もいたため、授業前半では基礎的な用語や理論について時間をかけて説明した。後半は医療や福祉、保育など様々な領域で実践された事例を紹介し、学生が学習した知識や理論をどのように実践の場で活かしていくのかイメージしやすいよう工夫し</p>

	た。
9.	<p>授業科目名【スクールカウンセリング論】</p> <p>受講人数は多くなかったが、実践に活かそうと意欲的に受講していた学生が多かった。そのため、解決志向アプローチをはじめとする主要な臨床心理学的援助方法について事例検討などを通じより実践的に学習した。また、教育者を目指している受講生が多かったため、教育的立場と心理的立場から児童生徒に関わる際の共通点や相違点などについても考え、多職種連携の重要性を確認した。</p>
10.	<p>授業科目名【専門研究Ⅰ・Ⅱ】</p> <p>学生は自ら学びたいキーワードやテーマを設定し、文献を検索した。文献購読やディスカッションを通じ、そのテーマや領域での基本的概念の整理や課題の検討を行った。学生が意欲的に学習に取り組めるよう、学生それぞれの興味関心に応じ文献を選択してもらった。</p>
11.	<p>授業科目名【対人関係論】</p> <p>円滑なコミュニケーションや適切な支援の基礎となる対人関係に関する心理学的理論について解説した。1年生を対象とした開講科目であり、心理学の学習が初めてである学生が多いため、学生からの授業内容に対する質問や感想について授業内で適宜取り上げて解説や回答をした。教員と学生間で相互的なやり取りを増やし、学生の理解が得られやすいよう配慮した。</p>
12.	<p>授業科目名【臨床健康心理学】</p> <p>臨床心理学についての基礎知識および、臨床心理学的視点を医療現場等でどのように患者理解や支援に活かすか等について解説した。受講生によって臨床心理学への理解度の差が見られたため、基礎的内容と事例などの発展的内容を合わせて伝えるよう工夫した。</p>

■ 学会における活動

	加入時期	所属学会等の名称	役職名等（任期）
1.	2010年4月～現在に至る	日本臨床心理劇学会	
2.	2010年4月～現在に至る	日本リハビリテーション心理学学会	
3.	2013年4月～現在に至る	日本心理臨床学会	
4.	2016年4月～現在に至る	日本発達心理学会	ニューズレター委員会委員 (2022年1月～2023年12月)
5.	2016年4月～現在に至る	特殊教育学会	
6.	2019年4月～現在に至る	日本心理学会	

■ 研究業績等に関する事項（2023年度）

	発行又は 発表の年月	著書、学術論 文等の名称	単著・ 共著の別	発行所、発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
(著書)					
1.					
2.					
3.					

(学術論文)					
1.					
2.					
3.					
(翻訳)					
1.					
2.					
3.					
(学会発表)					
1.	2023年8月	青年期における動作法を通じた自己との出会い	単著	日本臨床心理学会第42回大会 (於 パシフィコ横浜)	①心理臨床学研究 39 巻 2 号に掲載された論文「IBS 症状を呈する女子大学生の臨床動作法への主体的な取り組みのための工夫」が 2023 年度研究奨励賞を受賞し、受賞講演を行った。青年期を対象とした発達支援としての臨床動作法の意義について自己との出会いという視点から考察した。 ②第 42 回大会プログラム (p.18)
2.	2023 年 11 月	A 女子大学における「健康管理カルテ」の作成と配布ー学生の自己管理能力向上を目指してー	共著	日本学校保健学会第 69 回学術大会 (於 聖心女子大学)	①本学 1, 2 年生を対象に配布した「健康管理カルテ」の利用状況を調査した。その結果から、入学直後に配布した学生はあらゆる場面で利用しており、自身の健康に関心を持ち、健康意識が高まるよう入学直後の配布が望ましいこと、今後の利用意志のない学生も一定数いたことから、配布後も定期的に働きかけをする必要があることが考えられた。 ②共同発表者名：山田恵、水貝洵子、樋口由貴子、目野郁子、高崎智子 ③一般社団法人日本学校保健学会 第 69 回学術大会講演集(P130)

■ 外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(1) 共同研究				
研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（ ）内は学外者	交付決定額 (単位：円)	

1.				
2.				
3.				

(2) 個人研究				
	研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考
1.				
2.				
3.				

■ 社会における活動

	任 期 期 間 等	団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2023年4月～2024年3月	九州大学大学院人間環境学府附 属総合臨床心理センター	面接指導員
2.			
3.			

■ 学内における活動等（役職、委員、学生支援など）

	任 期 期 間 等	会議・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2022年4月～2024年3月	公開講座委員会	委員
2.	2022年4月～現在に至る	学生総合支援室	アドバイザー
3.	2022年4月～現在に至る	ダンスサークル	顧問